

# クレオールとジャマイカの社会的背景

## パトワ語と威信語としての英語

西村 栄蔵

### 1. Introduction

現在、世界には英語を公用語とする国が多くある。いまや、「英語は世界語」とまで言われるようになった。実際、英語の母語話者以外のもの同士がお互いの意思疎通を図るために英語を用いることもよくある。英語を話すことができれば世界中どこにでも行くことができる、と言っても過言ではないくらいである。しかし、英語の中にも様々な地域性が見られ、英語を母体とする方言やピジン・クレオールが多く存在する。これらが存在する要因には様々なものが挙げられるが、最も多い要因は長期にわたる植民地支配である。カリブ海の島国・ジャマイカはこれまで様々な国の植民地支配を受け、言語にもその影響が色濃く現れている。今回は、ジャマイカン・イングリッシュと呼ばれる「パトワ語」に焦点を当て分析する。

#### 1.1 ジャマイカの言語の歴史

ジャマイカにはかつて多くのアフリカ人が奴隷として連れてこられ、スペイン人によって植民地化された。一方、スペイン人の富に目を付けたイギリスの海賊達はそれらをのっとり、新たな植民地化を進めた。やがて海賊達は去ったが、よりまともな植民者達が英国王の富を築き上げるために訪れた。その後、何年もの間奴隷売買は続いたが、何回にもわたる奴隷達の激しい反乱の結果、ジャマイカはアメリカよりも30年早い1834年に奴隷制が廃止された。ジャマイカは300年以上も英国の支配下にあったが、1962年に、晴れて独立国となった。

植民者達は奴隷達の反乱を防ぐために言語の違う様々な地域から奴隷を連れてきて、言語による意思の疎通を遮った。その結果、奴隷達は植民者達の言語をまねて、それらと自らの母語を混ぜ合わせお互いに意思疎通をするようになった。それによりパトワ語という1つの言語が生まれた。このような要因からパトワ語と呼ばれるジャマイカン・イングリッシュは英語の変化した文法と発音によって構成されていると同時に、様々な西アフリカの方言とフランス語やスペイン語といったヨーロッパの言葉の影響も受けている。

## 1.2 方言とピジン・クレオールの変義

ここで英語の方言とピジン・クレオールというものを定義する。英語のいろいろな方言の大部分は、相互理解が可能である。地域方言であっても社会方言であっても、非常に数多くの音韻・語彙・統語上の特徴を標準英語と共有しているため、隣接している2つの方言が互いに理解できないような地域は存在しないと言える。一方、ピジンとは共通語を持たない人の間に起こる、限定的なコミュニケーションの必要のために生まれる言語、つまり2つの言語が出会うところに生じる第三の言語である。多くは商業を目的にした言語接触の中から生まれる。そのピジンを母語とする世代、つまりピジンを話す世代の次の世代が現れたとき、ピジンはピジンから発生した新しい言語、すなわちクレオールになるのである。ジャマイカン・イングリッシュにはクレオールから方言に変化したものなどがあり、クレオールと方言の間に明確な境界線を引くことはできない。クレオールと方言が混ざり合ったものを総称してパトワ語という。

## 1.3 パトワ語の分析

ジャマイカ独自の音楽「レゲエミュージック」に興味を持ち、それらを聴いているとパトワ語が多く出てきた。標準的な英語の文脈にパトワ語が混ざって現れるのである。パトワ語と標準英語の単語は発音・スペルとも明らかに違うものである。しかし、公用語が英語のジャマイカでは、完全な標準英語が現れる場合が必ずあるはずである。もし標準英語の文とパトワ語が混ざった文の両方があるのなら、公用語が英語のジャマイカで人々はそれら2つをどのように使い分けているのだろうかという疑問が浮かんできた。そもそもパトワ語とはどのような特徴があり、どのように人々に関わっているのだろうか。昔と今では変化があるのだろうか。そしてパトワ語を話す、またはパトワ語と英語を使い分ける背景にはどのような要因が考えられるのか、様々な分野のコーパスを集めさらにそれらをいろいろな条件に当てはめてその傾向を絞っていき、パトワ語の性質を分析することにする。なお、分析はあくまで、パトワ語がいつどこでどのように使われ、また使い分けられているかが中心なので、パトワ語そのものの文法や用法などの特徴には重点を置かない。必要な場合は説明を加える。

## 2. Hypotheses

### 2.1 パトワ語と威信語としての英語

ジャマイカの奴隷制が廃止されたのは160年以上も前の話である。奴隷制の廃止以後は大きな民族の出入りがなかったため、当時の支配国であるイギリスの英語を基盤としたク

## クレオールとジャマイカの社会的背景

レオールがその後の主流と考えられる。したがって昔に比べ多少の変化はあったにせよ、パトワ語自体の基盤はジャマイカに少なくとも 160 年以上根付いていると推測できる。1962 年の独立を機に、英語が公用語として定められ、教育機関でも英語の教育が普及していったにもかかわらず、今現在、レゲエミュージックを聴いていてもパトワ語が出てくるといことは、パトワ語は口語としてかなり定着しているのではないだろうか。しかし貧富の差が激しいジャマイカでは、一方で上流階級に属する人達は標準的な英語を好んで使うのではないだろうか。なぜなら公用語に英語という威信語があるため、国が定めた公用語、つまり標準英語を話すことが上流階級に属する彼らの教養を表す 1 つのステータスになっていると考えられるからである。

### 2.2 パトワ語とレゲエ

ジャマイカとレゲエミュージックは切っても切り離せないものである。歌詞の内容は、レゲエの誕生に衝撃を与えた当時のジャマイカ、および国際状況に強い影響を受けている。地位向上が制限されていた人口の大半を占める黒人達、貧困、マーカス・ガーヴェイの教えの普及、そしてアメリカのブラック・パワーなどが、レゲエミュージックの社会的な要素を作り上げた。「悪い社会状況からの離脱」という信念のもと、歌詞には怒りが込められ、音楽は反抗的になっていた。レゲエは常に一般大衆の味方だったのである。

さらにレゲエミュージックは娯楽の少ないジャマイカの唯一のエンターテインメントであり、街のいたるところにスピーカーが積み上げられそこからレゲエが流れている。特にジャマイカの首都、キングストンは一部のオフィス街を除きほとんどの地区がゲットーと呼ばれ、人々は日々貧しい生活を強いられている。そのゲットーのあちこちでレゲエが流れているということは、レゲエは一般大衆向けの娯楽と言える。さらにほとんどのレゲエミュージシャンがゲットーの出身で、彼らの書く歌詞の中にはパトワ語が頻繁に使われることがレゲエを聴いていてよく分かった。このことから次のような仮説を立てた。

### 2.3 仮説と分析の展開

以上のような理由から次のような仮説を立てた。

「パトワ語は下層階級に属する人々の間で口語として頻繁に使われている」

階級の分類について次のような定義付けをした。俗にいう「第三世界」に属すると言われるジャマイカは、貧富の差がかなり見られると推測できる。したがってパソコンは一部の上流階級を除き普及していないと思われる。また、下層階級に属する人々が毎日、新聞を取っているとは思われない。そこで、パソコンを持っておらず、新聞も取っていない人々は全

て下層階級に属することにした。これらの条件の両方、またはどちらか1つに当てはまる場合は全て中流以上に属することにした。

この他にも、男性が多く使うのか女性が多く使うのか、あるいは年齢による差はあるのか、などパトワ語の性質・特徴を細かく知るためには多くの疑問点が挙げられる。より正確な結果を得るためにこれらの疑問を解明することは重要なことであり、まずは仮説を中心に分析を進め、そこからこれらの疑問点についての分析も付け加え、結果を絞り込みできるだけ正確にパトワ語の性質や特徴、また話者の心理、ジャマイカの社会背景を分析する。

### 3. Materials & Methods

#### 3.1 使用コーパスとその分類

インターネットから使用する全てのコーパスを集めた。使用コーパスはジャマイカ人固有のものにするため、ジャマイカの検索エンジンからジャマイカのサイトを選んでコーパスを集めた。ジャンルについては思いつくもの全てを選んだ。ジャマイカの新聞、雑誌はもちろん、より一般大衆向けということでタブロイド誌、そして男性向け成人雑誌からも集めた。書き言葉だけに片寄ってしまうと仮説からずれてくるので、ジャマイカ人のインタビュー記事も集めた。インタビューは主にレゲエミュージシャンのものである。スポーツ選手やその他の様々なジャンルの人のインタビューを集めることができればよかったのだが、見つけられなかった。ホームページのメッセージボード(BBS)の書き込みも、文語というよりはきわめて口語的ではないかと思い、そこからもコーパスを集めた。そして、もちろんレゲエの歌詞からもコーパスを集めた。

Table 1 ジャンルとコーパスの数

新聞	66,246
雑誌	21,394
インタビュー	36,037
レゲエの歌詞	221,251
BBS	48,153

全てで 393,081 語のコーパスをソフトにかけて分析した。各ジャンルでコーパスの語数が異なるため、分析は頻度をもとに行った。

#### 3.2 各ジャンルのセクション

3.1 に挙げたジャンルをさらに細かいセクションに分類した。細かい分析をするときには、

## クレオールとジャマイカの社会的背景

セクションごとでソフトにかけ分析を行った。以下にセクションとそれぞれのコーパスの数を示した表を作った。

Table 2 新聞のセクション

コラム	29,806
投書欄	13,482
一般のニュース	11,804
タブロイド誌	11,154

Table 3 BBS のセクション

一般的なトピック	13,439
レゲエ	12,071
性的なトピック (男性)	11,822
性的なトピック (女性)	10,821

Table 4 レゲエのセクション

オールドレゲエ	61,191
ルーツレゲエ	56,052
ダンスホールレゲエ	104,008

オールドレゲエの歌詞は約半分がボブ・マーリーのものである。なお、雑誌とインタビューのセクションの分類は行わなかった。雑誌の種類はオールジャンルである。

### 3.3 レゲエの歌詞のセクション

レゲエの歌詞のセクションの分類について補足説明しておく。オールドレゲエとは 1970 年代から 80 年代後半までの歌詞のことを指す。90 年代に入った頃からレゲエの中で明確な違いが現れたので、90 年代以降の歌詞はルーツレゲエとダンスホールレゲエの 2 つに分類した。ルーツレゲエとは比較的ゆったりとしたテンポで通称「歌もの」と言われている。他方、ダンスホールレゲエはアップテンポのものが多く、アメリカのヒップホップの影響を受けラップにも似た独特な歌いまわしが印象的で、デジタルな音を使用しているのが特徴である。以上のような理由から、年代別で分析するためにオールドレゲエ、スタイルで分析するためにルーツレゲエとダンスホールレゲエ、全部で 3 つのセクションに分類した。

### 3.4 使用ソフトと分析の対象となった単語

分析ソフトは、WordSmith Ver.3.0 と TXTANA Standard Edition 2.45 を使用した。全てのジャンルのコーパスを WordSmith にかけてワードリストを作成し、パトワ語の冠詞、形容詞、前置詞、助動詞、動詞、疑問詞、副詞、代名詞がどのくらいの頻度で出てくるのかを調べた。対象になる単語は「パトワ語ハンドブック」から無作為に選出した。名詞はジャンルによって違いが現れ得るので、適切ではないと思い除外した。

TEXTANA は特別な場合のみ使用した。例えば、英語の ‘ a ’ は不定冠詞だがパトワ語では ‘ is / are ’、‘ to ’、‘ of ’、‘ at ’ などの意味を持つ。また ‘ a go + 動詞 ’ で英語の未来形を表す ‘ be going to ~ ’ の意味を持つ。例えば、“Mi a go play soccer inna di morrows” であるなら英語では、“I’m going to play soccer tomorrow.” となるのである。前置詞として文脈で使われている場合は後に名詞が続くのでその ‘ a ’ が冠詞であるか前置詞であるかを判断するのは難しい。したがって今回は ‘ a go ~ ’ の形を分析の対象として採用した。分析の対象となった単語は次のものである。

Table 5 分析の対象になったパトワ語とその意味

品詞	パトワ語	英語の意味
前置詞	pon	on
	inna	in、inside
動詞	mek	make、let
	gwaan	go
冠詞	di	the
	da	
疑問詞	wha ( wah )	what
	whe ( weh )	where
副詞	deh	there
	nuh	not、don’t
形容詞	nuff	enough、much、many
助動詞	cyaan	cannot
代名詞	mi	I、my、me
その他	a	
	dem	

Table 5 のその他の ‘ dem ’ について補足説明をしておく。英語の ‘ them ’ と同じ意味で目的語として使われることもあるが、多くの場合は名詞を複数形にするときに使われる。例えば、 ‘ man ’ の場合 ‘ men ’ ではなく ‘ man dem ’ となるのである。今回は目的語として使用されたか、複数形を形成するときに使用されたかではなく、 ‘ dem ’ が使用されたかどうか、そのこと自体を分析の対象にした。

## 4. Results & Discussion

### 4.1 各ジャンルのパトワ語の頻度

各ジャンルのパトワ語の頻度をそれぞれ表にして、品詞別に分析をした。便宜上、ダンスホールレゲエの歌詞を「lyric1」、ルーツレゲエの歌詞を「lyric2」、オールドレゲエの歌詞を「lyric3」とした。BBS、新聞、雑誌は各セクションをひとまとめにしてソフトにかけた。タブロイドは1つのジャンルとして数えた。頻度は全て100語に対する頻度である。最も頻度の多かったジャンルから、TXTANA を使い文脈を抜き出しパトワ語の例文として掲示した。また、分析結果から読み取れたことなどをさらに追究していき、パトワ語の特徴を絞り込んだ。

#### 4.1.1 前置詞

前置詞 'pon' 'inna' の結果は Table 6、Table 7 のようになった。いずれの単語もダンスホールの歌詞に圧倒的に多く現れた。その後に BBS が続いた。ルーツレゲエ、オールドレゲエ、インタビューはそれほど差がなかった。雑誌、新聞には全く現れなかったが、同じ出版物でもタブロイド誌には 'inna' が現れた。

Table 6 pon の使用頻度

lyric1	0.32
bbs	0.17
lyric2	0.09
lyric3	0.09
interview	0.07
magazine	0
newspaper	0
tabloid	0

Table 7 inna の使用頻度

lyric1	0.52
bbs	0.15
interview	0.05
lyric2	0.03
lyric3	0.03
tabloid	0.01
magazine	0
newspaper	0

lyric1 (ダンスホールレゲエの歌詞) に出てきた 'pon' と 'inna' をそれぞれ例文として掲示する。

“yu still nah go buss and it no wise fi yu walk pon street”

(歩いていかにバスに乗っていけばいいのに)

“god pray fi all di youth dem inna di street”

(神様はストリートの全ての若者のために祈ってくれている)

## 4.1.2 動詞

動詞 ‘mek’ と ‘gwaan’ の結果は Table 8、Table 9 のようになった。動詞も lyric1 (ダンスホールレゲエの歌詞) に圧倒的に多く現れた。雑誌、タブロイド誌には全く現れなかったが、前置詞と違い今回は新聞に現れた。ここまでの結果で、出版物、つまり書き言葉としてもごくわずかだが使われることが分かった。

Table 8 mek の使用頻度

lyric1	0.37
bbs	0.18
lyric3	0.12
lyric2	0.07
interview	0.06
newspaper	0.001
magazine	0
tabloid	0

Table 9 gwaan の使用頻度

lyric1	0.14
bbs	0.04
lyric2	0.04
interview	0.02
newspaper	0.003
lyric2	0.001
magazine	0
tabloid	0

lyric 1 (ダンスホールレゲエの歌詞) に出てきた ‘mek’ と ‘gwaan’ をそれぞれ例文として掲示する。

“war mek people lose dem life”

(戦争によって多くの人々が命を落とす)

“gwaan a wuk!!”

(仕事にいけ!!)

## 4.1.3 冠詞

冠詞 ‘di’ ‘da’ の結果は Table 10、Table 11 のようになった。‘da’ は lyric3 (オールドレゲエの歌詞) に多く現れた。しかし、‘di’ は lyric1 が最も多かった。したがって、近年は ‘di’ を多く使う傾向にあり、‘da’ は減少してきている傾向にあることが分かった。しかし ‘di’ は新聞、雑誌などの出版物には全く現れなかったのに対して、‘da’ は雑誌と新聞に現れている。詳しい使い分けについては疑問が残るが、記事を書いた記者が年配者だったのか、などいろいろな推測が考えられる。

## クレオールとジャマイカの社会的背景

Table 10 da の使用頻度

lyric3	0.12
lyric1	0.08
lyric2	0.03
bbs	0.01
interview	0.01
magazine	0.003
newspaper	0.001
tabloid	0

Table 11 di の使用頻度

lyric1	1.54
bbs	0.42
lyric2	0.16
lyric3	0.02
interview	0.008
newspaper	0
magazine	0
tabloid	0

lyric1 (ダンスホールレゲエの歌詞) に出てきた ‘di’ を例文として掲示する。

“him gi mi di strength fi mek mi sing a DJ”

(彼が DJ として歌う力を与えてくれた)

lyric3 (オールドレゲエの歌詞) に出てきた ‘da’ を例文として掲示するが、TXTANA にかけたところ lyric3 に出てきた ‘da’ は冠詞としてではなく、単なる歌詞の内容にすぎなかったことが分かった。lyric3 に出てきた ‘da’ は次のようなものであった。

“so take easy (easy skanking - da - da - da - da - da)”

lyric3 に出てきた ‘da’ を全て TXTANA で文脈を改めて調べたが冠詞として使われることは一度もなかった。したがって lyric1 に ‘da’ が最も多く現れたが、‘di’ と比べると頻度の差は明らかである。それでは lyric1 に出てきた ‘da’ はどのようなものだろうか。TXTANA にかけて検証してみた。

“di smoke clears, and da war is gone”

(煙が晴れて、戦いが終わる)

lyric1 の ‘da’ は冠詞だった。さらに興味深いことに、この例文には ‘di’ と ‘da’ が両方現れている。それぞれの使い分けについてはいまだ疑問点が多いが、冠詞は ‘di’ を頻繁に使うということは結果から明らかである。

### 4.1.4 疑問詞

疑問詞の ‘wha’ と ‘whe’ はそれぞれ ‘wah’ と ‘weh’ にも置き換えることができるので、分析の対象には両方とも採用した。分析の結果は Table 12、Table 13 のようになった。やはり lyric1 がいずれの単語も多かった。‘whe’ は全ての出版物と lyric3 には全く現れなかった。lyric1 (ダンスホールレゲエの歌詞) に出てきた ‘wha’ と ‘whe’ を例文として掲示する。

“Mi nuh know wha fi do wid myself”  
 (なにをすべきか分からない)

“dem collect wi tax an wi nuh si whe de money gon”  
 (彼らはわれわれから税金を徴収するが、その金がどう反映されているのか全く見えない)

Table 12 wha の使用頻度

lyric1	0.23
interview	0.13
bbs	0.11
lyric2	0.08
lyric3	0
newspaper	0
magazine	0
tabloid	0

Table 13 whe の使用頻度

lyric1	0.30
bbs	0.11
lyric3	0.05
interview	0.02
lyric2	0.01
newspaper	0.001
magazine	0
tabloid	0

#### 4.1.5 副詞

副詞 ‘nuh’ と ‘deh’ の使用頻度は Table 14、Table 15 のようになった。ここでも lyric1 に圧倒的に多く、その後に lyric2、3、インタビュー、BBC が順位を入れ替えながら続くというこれまでと同じ傾向が見られた。出版物には ‘nuh’ はある程度、‘deh’ は若干だが現れた。lyric1 がかなりパトワ語の頻度が高い、つまり関連性が高いことが徐々にだが見えてきた。

Table 14 nuh の使用頻度

lyric1	1.04
bbs	0.15
lyric2	0.08
interview	0.06
lyric3	0.02
tabloid	0.02
magazine	0
newspaper	0

Table 15 deh の使用頻度

lyric1	0.25
bbs	0.15
interview	0.14
lyric3	0.07
lyric2	0.04
newspaper	0.001
magazine	0
tabloid	0

## クレオールとジャマイカの社会的背景

lyric1(ダンスホールレゲエの歌詞)に出てきた‘ nuh ’と‘ deh ’を例文として掲示した。

“ dem nuh waan si wi face ”

(彼らはわれわれの顔を見たくないらしい)

“ nuff evidence deh fi show ”

(証拠ならたくさんある)

### 4.1.6 形容詞

形容詞‘ nuff ’の使用頻度を Table 16 に表した。やはり lyric1 に‘ nuff ’がとびぬけて多く現れた。その後に BBS、lyric2、インタビュー、lyric3 の順で続いた。新聞、雑誌などの出版物には‘ nuff ’は全く現れなかった。lyric1(ダンスホールレゲエの歌詞)に出てきた‘ nuff ’を例文として掲示する。

“ nuff time mi dream ”

(何度も夢を見た)

Table 16 nuff の使用頻度

lyric1	0.19
bbs	0.06
lyric2	0.03
interview	0.02
lyric3	0.01
magazine	0
newspaper	0
tabloid	0

### 4.1.7 代名詞

代名詞‘ mi ’の使用頻度を Table 17 に表した。‘ mi ’は英語の‘ my ’‘ me ’の意味でも使われるが、分析は代名詞‘ I ’と同じ用法で使われた‘ mi ’のみを対象とした。頻度の差は歴然だが雑誌以外には全て現れた。lyric1 に圧倒的に多く現れている。インタビューよりもタブロイドの頻度の方が上回っているのも興味深い。さらにここまでで、雑誌にはあまりパトワ語が現れないという傾向が分かってきた。lyric1(ダンスホールレゲエの歌詞)に出てきた‘ mi ’を例文として掲示した。

“ Mi neva know dat. ”

(そんなこと全然知らなかった)

Table 17 mi の使用頻度

lyric1	2.63
bbs	1.2
lyric2	0.26
lyric3	0.04
tabloid	0.03
interview	0.008
newspaper	0.007
magazine	0

## 4.1.8 助動詞

助動詞 ‘cyaan’ の使用頻度を Table 18 に表した。やはり lyric1 が最も多かった。さらにこれまでの分析で、出版物の中ではタブロイド誌にパトワ語が多く見られる傾向があることが分かった。しかし、その他のジャンルに比べるとその頻度はきわめて少ない。

lyric1 (ダンスホールレゲエの歌詞) に出てきた ‘cyaan’ を例文として掲示した。

“him cyaan tell him fren nutten”

(彼は友達に何も伝えられない)

Table 18 cyaan の使用頻度

lyric1	0.07
bbs	0.02
tabloid	0.02
lyric2	0.01
interview	0.008
lyric3	0.004
magazine	0
newspaper	0

## 4.1.9 その他のパトワ語

最後にその他の ‘dem’ と ‘a’ の使用頻度を Table 19、Table 20 に表した。まずは ‘dem’ から分析した。‘dem’ は ‘they’ や ‘them’、また複数形を形成するときなど多くの場合に使われるので、やはりその頻度も高かった。しかし、新聞と雑誌には全く現れなかった。

lyric1 (ダンスホールレゲエの歌詞) に出てきた ‘dem’ を例文として掲示した。

## クレオールとジャマイカの社会的背景

“suh dem nice mi cyaan ignore dem”

(彼らは隅におけない存在だ)

Table 19 dem の使用頻度

lyric1	2.64
bbs	0.53
lyric2	0.43
interview	0.42
lyric3	0.35
tabloid	0.03
magazine	0
newspaper	0

次に ‘a’ について分析した。3.4.で補足説明したように、分析には ‘a go’ の形を採用した。Table 20 は ‘a’ の後に 100 語中の ‘go’ が続く頻度である。Table 20 を見ても分かる通り、これまでの傾向が崩れ lyric3 に最も多く現れた。その後に BBS が続きこれまでの単語も圧倒的に頻度の高かった lyric1 は 3 番目だった。なぜこのような結果になったかについてはさらに詳しい分析が必要なので、‘a go’ の考察は 4.5.にまわすことにする。ここでは lyric3 (オールドレゲエ) に出てきた ‘a go’ を例文として掲示する。

“we no know how we and dem a go work this out”

(彼らと一緒にどうやってこれを解決していけばいいのだ)

Table 20 a go の使用頻度

lyric3	3.5
bbs	2.4
lyric1	2.2
lyric2	1.7
tabloid	0.8
interview	0.3
newspaper	0
magazine	0

## 4.2 頻度結果の考察

パトワ語が使用されるのはレゲエの歌詞とその他の口語表現の場合に多いことが分かった。われわれが普段メールでやり取りするときには文語よりもどちらかというより砕けた口語の方を多く用いることを考えると、やはり BBS にもパトワ語が現れたのも頷ける。どのジャンルもダンスホールレゲエの歌詞に最も多くパトワ語が現れた。ダンスホールレゲエの歌詞になぜ多いかの分析は後にまわすとして、頻度結果からさらに興味深いことが読み取れた。

BBS にメッセージを書き込むということはインターネットの使用者、つまりパソコンを持っている、あるいはパソコンを使うことのできる者に限定される。したがって中流階級以上に属する人々と推測できる。その BBS にパトワ語が出てきたということは中流階級以上の人々もパトワ語が理解できる、さらに言えばパトワ語を口語としては使用していると言える。

同じようなことが新聞、タブロイド誌、雑誌に出てきたパトワ語にも言える。いずれの単語も頻度は非常に低かったが、パトワ語が出版物にも出てきたという事実は大変貴重かつ興味深い結果になった。出てきたパトワ語の前後の文脈を TXTANA で分析した。

### 例文

(1) that (using a inner-city term) "tan so bac an' deh watch wa a gwaan". I refer, of course, to the . . . . .

(新聞に出てきた 'deh' と 'gwaan')

(2) the hand of Michael. In other words, "a Michael mek mi do it". Those who were very close to the . . . . .

(新聞に出てきた 'mek' と 'mi')

(3) you have to ask, "Ah wha do we so?" Why have we chosen to . . . . .

(タブロイド誌に出てきた 'wha')

例文の 1、2、3 いずれの文脈を見ても分かるように、全て会話の中でパトワ語が使われている。新聞記者はパトワ語を文語として書いても読者が理解できる、という前提でパトワ語を記事の中に入れた。読者とはつまり中流階級以上に属する人々である。

では、なぜそこで記者は敢えてパトワ語を文語として使ったのだろうか。恐らく記者は口語であるパトワ語を使うことによって、記事の会話の部分によりインパクトを付けたかったからであろう。口語を文語として使うことによりさらに文が生き活きと見え、文章のメッセージ色が濃くなるのを見込んだに違いない。つまり口語としてのパトワ語は強く意思を伝えたい、訴えかけたい場合の伝達コードとして使われているのであろう。

ここまでを踏まえて、最もパトワ語の頻度が多かったジャンル、ダンスホールレゲエの

## クレオールとジャマイカの社会的背景

歌詞について改めて考察する。ダンスホールレゲエの歌詞の内容はどのようなものなのかを調べるため、WordSmith を使いもう一度分析し、出てきた結果からレゲエアーティストの歌詞に込められたメッセージについて分析した。形容詞や動詞では判断しづらいため、分析の対象は名詞のみに限定した。100 語のうち、頻度が 0.1 以上のものだけを選んだ。結果は Figure 1 のようになった。

人を表す名詞が非常に多く見られた。これは男女の関係が荒れているジャマイカの現状を歌詞にしたものと思われる。さらに、' man 'に限っては、レゲエミュージシャンの大半が男性であることから、「同胞への呼びかけ」を指すと推測できる。その他にも「人々」(同じ境遇の者を指すのだろうか)「生活」あるいは「命」について、また「戦い」(恐らく国家権力に対するものと思われる)「銃」などいずれも現在のジャマイカが置かれている悪い社会状況を反映するものが歌詞に多い。レゲエミュージシャン達は口語であるパトワ語を、自分達の意志、メッセージを強く伝えるための伝達コードとして使っていることが分かった。

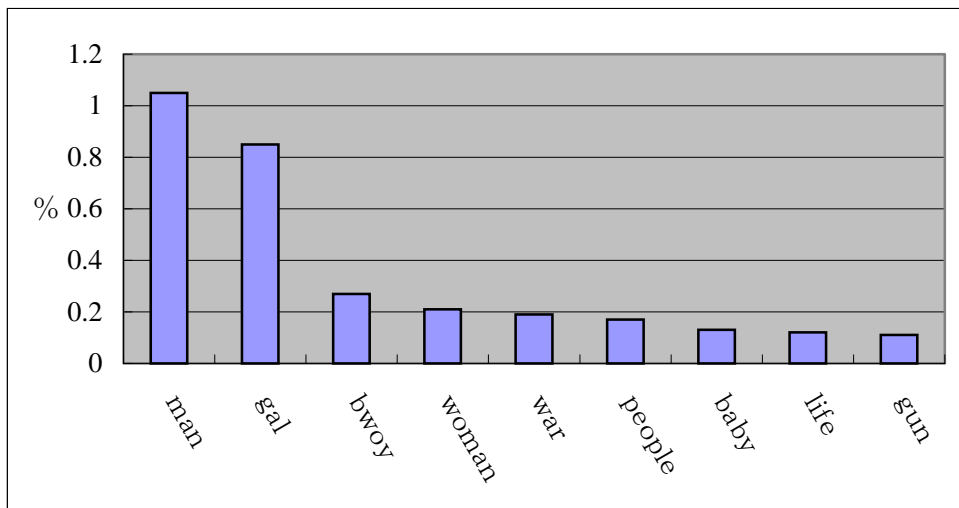


Figure 1 ダンスホールレゲエの歌詞に出てきた名詞 (100 語中 0.1 以上)

最後にインタビューの頻度について考察した。恐らく全てのジャンルで最も口語的な状況にあるのがインタビューであろう。しかし、頻度がそれほど高くなかったのはなぜだろうか。それには次のような要因が考えられる。インタビューを受ける側に何らかの心理的作用が働いて、リラックスした状態になかった、一種の緊張状態にあったのではないだろうか。考えられることは、ジャマイカ人ではない人にインタビューを受けた可能性がある、ということである。つまり、話者は自分がパトワ語話者だという自覚はあるが、ジャマイカ人ではない人に対して果たしてパトワ語が通じるのかという疑問を感じ、自らの言語を相

手の言語に合わせた、つまり標準英語に切り替えたのではないだろうか。あるいは、パトワ語は崩れた英語であるという劣等感を感じ、自らの言語を修正し、敢えて標準英語を話すように意識したのではないだろうか。このような言い方をしたら誤解を招くかもしれないが、パトワ語は英語の崩れたもので劣っている言語である、などという気は全くない。そもそも言語には優劣の差などないのである。しかし、話者の心理は話者本人にしか分からないものである。インタビューを受ける際に、もしこのような心理的な作用が働いたのであるならば、インタビューでのパトワ語の頻度が比較的高くなかったことについては頷ける。

#### 4.3 性別の差

レゲエミュージシャンの大半は男性のため、したがってレゲエの歌詞とインタビューは分析の対象にはならない。そこで、BBS を分析の対象とした。BBS の一般的なトピックのセクションには女性が多く、一方、レゲエのセクションには男性が多かったため、片寄りのなかった性的なトピックのセクションを選んだ。分析の方法は 4.1 で対象になった全てのパトワ語の頻度をまとめその平均値を出した。つまり、単語 1 つ 1 つの頻度ではなく、パトワ語が現れた全体的な頻度を出した。男女の見分け方については投稿者の名前を参考にした。性別の見分けが付かない名前、仮名は全て除外した。結果は Table 21 のようになった。

Table 21 BBS におけるパトワ語の頻度 (100 語中)

MALE	0.31
FEMALE	0.32

性別による差は全くないと言ってよい。したがって男性も女性も同じようにパトワ語を使用するということが分かった。ここで、性別の分類が果たして正確だったのかという疑問が浮かんでくる。男性が女性の名前を使って投稿した、あるいはその逆も考えられところだが、男女の分類についてはきわめて正確だったと言える。なぜなら、もし仮にパトワ語が男性の使用する言葉だとするなら、女性の名前でパトワ語の投稿があった場合、そのことについて男性から何らかの反応があったはずである。しかし、BBS における会話のやり取りはきわめてスムーズなものであった。このことから性別の分類は正確だったと言える。

#### 4.4 パトワ語と宗教

まずなぜ宗教との関連性について疑問を持ったのか説明する必要がある。ジャマイカにはジャマイカ特有の宗教、ラスタファリズムがある。エチオピアの皇帝、ハイレ・セラシエ世を崇拝する宗教で、生粋の信者はアルコールと塩を避け、果物、根菜、穀物、野菜そして魚しか食べない禁欲生活を実践する。また旧約聖書の中の、かみそりに対する戒めを遵守し、ドレッドロックと呼ばれる、切らずに、櫛もいれず伸ばしたままにしてある髪の毛が特徴的である。ラスタファリズムはレゲエミュージックとともにジャマイカに広がり、現在ではジャマイカの1つの文化となっている。1960年代後半あたりからこのラスタファリズムは広まったわけだが、それよりも以前に当然パトワ語は存在していたわけで、パトワ語に宗教が大きく関係しているとは言えないが、国の1つの文化としてラスタファリズムが広まっている現在、パトワ語の中にラスタファリズムの影響が見られる傾向になったかどうかを分析する意義は十分にあるのではないだろうか。

レゲエの中でも特にルーツレゲエのミュージシャンの多くはラスタファリズムを厚く信仰している、つまりラスタファリアンが多いと一般的には言われている。一方、ダンスホールレゲエはルーツレゲエほどラスタファリズムとの関連性は薄く、なおかつパトワ語の頻度は圧倒的に多かった。ルーツレゲエのミュージシャンにラスタファリアンが多いという一般論を定義として、ルーツレゲエの歌詞とダンスホールレゲエの歌詞を比べていく。分析方法としては、宗教用語の名詞をあらかじめいくつか決めそれらの頻度を見ることにした。仮にラスタファリアンの多いルーツレゲエの歌詞よりダンスホールレゲエの歌詞の方に宗教用語が多かったとすると、パトワ語にはラスタファリズムとの関連性があると言える。なぜなら、ダンスホールレゲエの歌詞には圧倒的にパトワ語が多いからである。四つのラスタファリズムに関する名詞の頻度を Figure 2 に表した。「JAH」は神様、つまりハイレ・セラシエ世を意味する。「RASTA」はラスタファリズム、またはラスタファリアンのことを指す。「DREAD」はラスタファリズム特有の編み込んだ髪の毛のことを指す。

Figure 2 を見ても分かるように、ルーツレゲエが全ての頻度で上回っている。以上を踏まえて次のようなことが分かった。ラスタファリアンが多いルーツレゲエの歌詞の方が、パトワ語の頻度が最も多かったダンスホールレゲエの歌詞より宗教に関する単語で上回った。これにより、ラスタファリアンがルーツレゲエのミュージシャンに多いことが証明され、そのうえパトワ語の使用頻度が最も多かったダンスホールレゲエはルーツレゲエの結果を下回ったためパトワ語と宗教の関連性はない。

しかし、ルーツレゲエの結果は下回ったものの、ダンスホールレゲエの歌詞にも少ないが確かに宗教用語は現れている。つまり、レゲエとラスタファリズム、レゲエとパトワ語は関連性があるが、パトワ語とラスタファリズムは直接関係がないという結論に至った。ここまでの分析でパトワ語の特徴をかなり絞り込むことができた。最後に年代よりの差を分析しパトワ語に変化があったのか分析する。

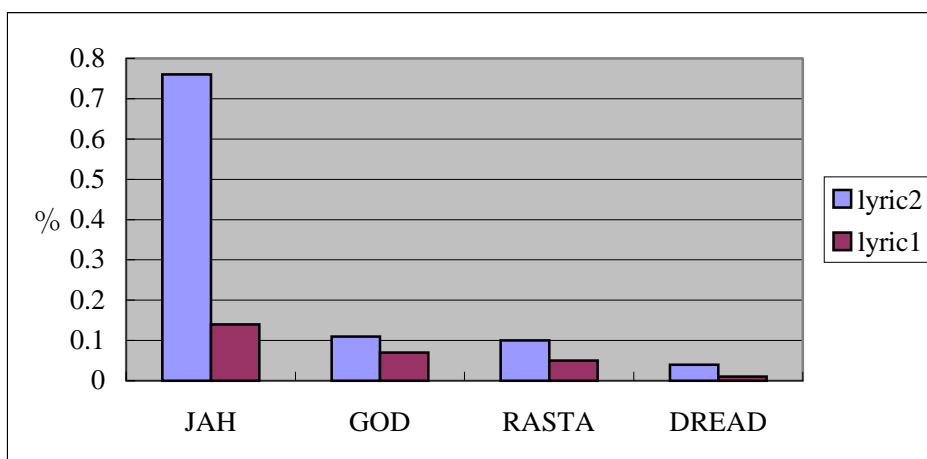


Figure 2 宗教用語の頻度 (100 語中)

#### 4.5 年代による変化

4.1.9 の 'a' の分析結果において、それまで常にパトワ語の頻度結果が圧倒的に多かったダンスホールレゲエの歌詞がオールドレゲエの歌詞にその結果を上回っている。この結果に疑問を感じ、さらに詳しく分析したところ、年代の変化を表す興味深い結果が明らかになった。結果を Table 22 に表した。

Table 22 'a' に続く名詞の頻度 (100 語中)

lyric1		lyric3	
go	2.29	go	3.55
come	0.82	come	2.50
tell	0.76	make	0.34
gwaan	0.73	move	0.20
run	0.65	tell	0.14
talk	0.61	see	0.07
get	0.60	gwaan	0.07
try	0.50	have	0.07
look	0.48	該当なし	0
move	0.41	該当なし	0
seh	0.41	該当なし	0
mek	0.39	該当なし	0

この2つのセクションを改めてTXTANAで分析し‘a’の後に続く動詞に限定し結果を抜き出したところ面白いことが分かった。lyric3には‘a’に続く名詞が全てで八つしかなかった。一方、lyric1にはここでは頻度の上位12までの動詞しか挙げていないが、この他にもたくさんの動詞が現れた。たくさんの動詞が現れその結果、lyric1の‘a’に続く‘go’の頻度が低くなったのである。さらにこのことから年代による変化が見られた。つまり、1970、80年代に比べ、‘a’の後に動詞が使用できる頻度が増えているため、パトワ語の使用範囲も年代を追って増えてきたと言える。近年、‘a’の後には様々な動詞が取れるようになったのである。

### 5. Conclusion

結果は仮説とは異なり、社会の階層、または性別に関わらずパトワ語は口語として広くジャマイカに浸透していることが分かった。さらに、パトワ語は自分の気持ちを最も正直に表現できる伝達コードであることも分かった。また、パトワ語は長い間ジャマイカに根付いている言語で、年代を追って変化してきた。ここでボブ・マーリーの本からある一文を抜粋したい。「担当記者が、収録テープのボブの早口ななまりの連発から、ラスタのわけの分からない言葉という以外、何も理解できなかったのだ」つまり当時からパトワ語は定着していたが、一方では標準英語の話者からは劣っている言語、崩れた英語というレッテルを貼られていたのだ。しかし、現在社会階層を問わずこれほどまで普及したパトワ語は、単なる崩れた英語では片づけられない、1つの文化になっている。パトワ語を話すことはジャマイカ人である彼らの存在証明にもつながるのである。

さらに、レゲエミュージックは近年のパトワ語に最も大きな影響を与えていることが分かった。新しい言葉やスラングなどは全てレゲエから発信されていると言える。エンターテインメントの枠を超え、レゲエミュージックはジャマイカでは非常に大きな存在であることを改めて実感した。一方で、ダンスホールレゲエの歌詞を見てみるとその大半は社会状況の悪さが歌われ、いまだに改善されないジャマイカ社会の現状が浮き彫りになっていると言える。

口語としてはかなり広まっているパトワ語だが、一方で文語としてはいまだ発展途上の段階にあると言える。新聞、雑誌などの出版物に使われたのも一部の会話部分だけである。ジャマイカ人のほとんどが口語ではパトワ語を話すという状況の中で、果たして今後、文語としてパトワ語が浸透していくことがあるのだろうか。それはまず起こり得ないと思える。なぜなら、文語として浸透するには公用語をパトワ語にし、教育の現場でパトワ語を書き言葉として教えなければならない。しかし、外国とのビジネスが国の収入の大半を占める国にとって、多くの人の読み書き能力がパトワ語だけに限定されることは、決して利

益になるとは思えないからである。したがって、これからも英語は公用語として、そして威信語としてジャマイカに存在していこう。

「英語は世界語」と言われる中で、それは単なる交流手段の言語としてでなく、もっと大きな力の広がりだということを実感した。パトワ語の分析をとおして世界における英語の強さを改めて知ることができた。ジャマイカはこれからも自分達のパトワ語を文化として、また言語遺産として残していく一方で、威信語である英語を受け入れていかなくてはならないのだろう。そうする中でいつかパトワ語という1つの言語が失われていくときが来るのかもしれない。一国の将来をも左右し得る言語の持つ力の大きさ、そして怖さを今回の分析から学ぶことができた。

### References

- Loreto Todd (著)・田中幸子(訳)(1986) 『ピジン・クレオール入門』 大修館書店  
田中春美・田中幸子(1996) 『社会言語学への招待』 ミネルヴァ書房  
中尾俊夫・日比谷潤子・服部範子(1997) 『社会言語学概論』 くろしお出版  
田中克彦(1981) 『ことばと国家』 岩波新書  
Peter Trudgill(著)・土田 滋(訳)(1974) 『言語と社会』 岩波新書  
レナード・E・バレット Sr.(1996) 『ラスタファリアンズ』 平凡社  
Yvonne Goldson(1998) 『パトワ語ハンドブック』 アップリンク発行  
伊藤 亘(1997) 『JAMAICA & REGGAE AtoZ』 TOKYO FM出版  
Stephan Davis(著)・大橋悦子(訳)(1983) 『ボブ・マーリー』 晶文社

### コーパスを集めたサイト

LION MIX.Com

<http://www.lionmix.com/>

The Reggae Web

<http://www.reggaeweb.com/>

Reggae Sound.com

<http://www.reggaesound.com/>

Top Shotta Dancehall Site

<http://www.shottalinks.net/>

JamworldReggae.com

<http://www.jamworldreggae.com/>

Welcome to home of Reggae in Japan

## クレオールとジャマイカの社会的背景

<http://club-jamaica.com/>

Bob Marley Lyrics Part 1

<http://www.alwaysontherun.net/bob.htm>

Lyrics

<http://members.tripod.com/~raddy73/lyrics.html>

JAMAICA OBSERCER Internet Section

<http://www.jamaicaobserver.com/>

Down Sounds Record.com

<http://www.downsoundrecords.com/discus/>

Playazz

<http://www.ppreggae.com/reggaefashion/index.htm>

West Indian Time Home Page

<http://www.westindiantimes.com/>

X-News Jamica

<http://www.xnewsjamaica.com/>

One Magazine

<http://www.onemagazine.net/>

Woman to Woman Magazine

<http://www.w2wmag.com/>

Jam Auto.com

<http://www.jamauto.com/>